



「巨匠レイブラッドベリ氏へのオマージュ 愛の手紙」

君にお話ししたいことはたくさんある。あまり多いのでどこから始めてよいのやら迷うほどだ。幸い、わたしは自分の身に起ったことは大部分忘れてしまった。人間の記憶力に限度があるとは幸いなことだ。

名前というものは取るに足りないものだが、その点都合がいい。というのはわたしは色々な理由から十回以上も名前を変えてきたからだ。16才の時広島で被爆し、その時わたしの体に変化が起きたのです。生物学的変化。わたしは被爆する前、脳下垂体の奇病にかかっていた。とにかく肥満する病気なのだ。身長割に体重が過多で、そのくせスタミナがないという奇病だった。勤め先の軍需工場の仕事は肉体労働ですぐ疲れて、大嫌いだった。父がそこで検査係をしていて将来は検査の仕事をしてもらえる予定だった。しかし、医者からはどのみちあと2、3年の命だとも宣告されていたのだ。

わたしが被爆したのは爆心地から300メートルくらい離れた吉島町の塗料工場に臨時派遣されたときだった。病院で意識を回復してからわたしは長い間頭痛に悩まされた。体は別にどこと行ってやけどしたところはなかった。ただ頭がひどく痛むのだった。

その当時、麻酔剤はもはや残っていなかったので頭痛で眠れぬ夜が続いた。重度の放射線障害を受けた最初の数か月は、このような堪え難い苦しみを嘗めたが、やがてゆっくりと回復に向かった。頭痛も治まった。しかしわたしは眠れなかった。――これは奇妙なことだった。そして、恐ろしいことだった。なぜなら、自分の体にどんな変化が起きたのかわからなかったし、わからないということは常に恐ろしいことなのだ。

医師たちはわたしにほとんど注意を払わなかった。何しろ火傷や負傷をした何千人の被爆者の中で別に外傷を負っているわけではなくただ頭が痛いという理由だけでは患者のうちに入らなかったからだ。そして少しも眠れないという訴えを医師は信用しなかったのだろうと思う。わたしが不眠症にかかって誇張してそう訴えているのか、ないしは本人が勝手にそう思い込んでいるものと彼らは考えたのだ。しかしわたしは実際に全然眠れなかったのだ。

もうひとつ不思議なことは持病の脳下垂体の病気が治ったらしく、やがて体重も平常に戻り、均整の取れた体型になったのだ。

わたしは約3年間眠らなかった。そのあとでまた眠るようになった。2年近くも続けて眠ったのだ。父が爆死して、残された唯一の肉親だった母はわたしが植物人間になったのだとあきら

めた。食欲はあったらしく、口に食べ物を入れてもらおうと、薄目を開けて、嚙んで飲み込んでいたという。そして2年目のある日わたしは何もなかったかのように意識をとり戻した。

この不思議な5年間が経過したとき、わたしは肉体的には依然として16才のままだった。わたしの浴びた放射能——ないしは放射能と太陽光線の組合せが、わたしの脳下垂体の機能を根本的に変えてしまったのだと思った。それに付随して、それまで患っていた奇病が原爆症と組合わさってこの異常現象が生じたのだと考えた。

体が成長する因子がわたしから無くなったわけではなく、その速度がおそらくは数百倍数千倍も遅くなったのだと思う。つまり例えば5年の間に一日の割合で歳をとる。だから完全に成長が止まったわけではない。原爆の日からの過去67年の間にわたしの体はほとんど成長していない。わたしの肉体年齢はまだ16才のままである。約5年という歳月がわたしにとっては1日にすぎないのだから。しかし私はもうおおよそ83歳だ。

約3年間は眠らず、そのあとで2年間ほど眠る、これがずっと繰り返され、これからも繰り返されるだろう。

わたしは睡眠中の生命維持の手だてに工夫を凝らさねばならなかった。始めは、唯一の肉親である母に頼ったが、老いた母が死んでからは、冬眠するごとく四季を通じて安全な場所を見つけてこもった。まったく動かないとっていいので、食料はたいしていらす、よほど空腹になって一時的に目が覚めたときのため保存食をそばにおいておいた。こうして睡眠中も無事過ごすことができた。

いやいや、睡眠中に生き延びるチャンスの方が目覚めて活動している期間中に生き延びるチャンスよりも強いのだ。

わたしは今までに500人を越える男と関係を持った。そしてみな私のほうから去った。わたしが常人とは違う人間であることを他人に気づかれなくなかったから。

わたしは夜ごと横になって眠ったふりをしながらも、数時間もまんじりともせずにごろごろしたものだ。

妊娠したこともあった。しかしすぐにどんな時でも墮ろした。それは相手の男の意志がそうだったし、自身自分の原爆症のせいで子に異常が生じるのではないかと恐れたり、そうでなくても自分の体では妊娠から分娩までやはり何十年もかかるのではないかという恐れがあったからだ。

そして未婚の母が2年間眠ったら幼児は生きるすべを失うことになるから。

そして君が現れた。君はなんと美しい瞳を持っていることでしょう。そして、まだ知り合っ
て一ヶ月足らずだというのに、私にプロポーズした。私は断った、理由は手紙で知らせると言
って。これがその手紙です。私が83歳になって初めて書いた、愛の手紙です。

かしこ

写真(photos):

amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro